俳人協会
岐阜県支部会報
第43号
発行者　今津　大天
発行所　俳人協会
岐阜県支部事務局
〒502-0903　岐阜市美島町4-33
船戸成郎　方
TEL・FAX 058-231-5068
振替口座　00870-9-77529

第二十三回 芭蕉の道俳句大会

―櫂未知子先生を講師に―

塚本六可

風薫る五月十八日（土）十三時より、岐阜市の「じゅうろくプラザ」にて「第二十三回芭蕉の道俳句大会」を開催、二三〇名程の参加があった。

開会挨拶で今津支部長は、「消齢化」「高齢化」の「消」と「高」の一字の違いで印象や心持が変わることにふれながら、自分を褒める言葉を見つけて意識を変え、自分を高めていくことが大切であり、皆で頑張っていこうと会場を鼓舞された。

続いて、俳誌「群青」共同代表で俳人協会理事の櫂未知子先生より、「食の楽しみ」と題して講演をいただいた。概要を以下に示す。

講演を拝聴

初めは学友からの誘いで短歌を学んでおり、定型の面白さを知ったが、「あなたの短歌は五七五で終わっている」と言われたことを契機に俳句に心が向いた。全国の結社に手紙を書き、見本誌を集めることから俳句を始めた。

その際、印象的だったのは食べ物の季語や句が多いことだった。短歌では、想いや恋愛感情が重視され、食べ物が扱われることがなかったため、俳句では食べ物がメインになり得ることに驚き、食に関する例句を集めるようになった。自著の『食の一句』では、食べ物の他、調理器具や体の変化など、食に関する句を紹介している。

食は生活や文化にたぶんに関わっており、結婚等で住む地域が変われば食も変わることは普通であるし、自分の出身地である北海道では、各地からの開拓者が各々の出身地にルーツを持つ食文化を持ち込むため、隣同士でもどんなものを食べているか知らない「隣雑煮」という言葉がある。歳時記出版に携わっていた時、全国の俳人に雑煮についてアンケートを行ったことがあるが、大変に興味深い結果となり、餅の形は勿論のこと、愛媛県のように餡入りの餅を使うことがあるなど、「雑煮」は文化を知ることができる季語だと思った。

講演中の櫂未知子先生

豆腐が夏は冷奴、冬は湯豆腐として食されるように、同じ食べ物でも、季節により食べ方が異なりつつ其々生活の季語になっていることがある点も重要である。また、季語に「夏料理」はあっても「冬料理」はなく、前者は冷たさや瑞々しさを思わせるが、後者は鍋料理など温かい別の料理に細分化しているなど、季節による食べ物の捉え方の違いがある点も面白い。

このような話とともに、櫂先生は、食べ物が季語になった例句と、食べ物が句材になっている例句を紹介され、詠まれた食べ物の特徴のみならず、食べ物が持つ根源的な背景や調理方法、食べる時の動作や場所、あるいは詠者にまつわるエピソードや自身のご経験などを交えながら、その句の楽しさや良さ、深みなどを解説してくださった。

俳句は「食」が中心となり得る稀有な詩型であり、「食」は命をつなぐのみならず、生きていく上での心の「糧」なのではないか。コロナ禍や先般の能登の地震などの災害を見るにつけ、生きていくために、体にも心にも糧となる「食」が大事なのではないかと考え、今回のテーマを掲げたと締めくくられた。

資料は、聴講者の発想を促せるよう穴埋め形式になっており、埋められる季語や言葉が告げられる度、会場が響動めいた。やはり、食が生活の一部であり、句意として納得しやすかったり、取り合せの意外性が面白かったりしたのであろう。

講演後、事前応募句と当日句の優秀作品の講評、表彰式が執り行われた。

第二十三回　芭蕉の道俳句大会

令和六年五月十八日（土）
じゅうろくプラザ・ホール

入賞作品（応募句の部）

俳人協会賞
しろがねの連山はるか土筆摘む　度会さち子

岐阜県支部賞
闇汁の最初の箸をゆづりあひ　竹内すま子

岐阜県知事賞
夜の早き柳ヶ瀬通りうかれ猫　後藤　和朗

岐阜県議会議長賞
瓦礫とは悲しき言葉能登の春　村瀬いく子

岐阜県教育委員会賞
寒紅をつけて米寿の祝ひ膳　伊藤　しき

岐阜市長賞
始発バス待つ元旦の夜勤明け　廣瀬あや子

岐阜市議会議長賞
三月やパンの値も記す闘病記　林　富士子

岐阜市教育委員会賞
競走馬曳かれてゆきぬ花菜風　岩田　恵子

岐阜観光コンベンション協会賞
空き箱の山へ空き箱年の市　飯田　正幸

秀逸賞
菜飯炊く能登の本塩一つまみ　竹中　孝子
春風や乗り放題の乗車券　鷹見美佐江
春一番聞こえぬ耳を叩きゆく　長　昌子
風邪の子にまたはじめから読む絵本　梅枝あゆみ
招かれし思ひに進む恵方道　三本松隆男
紙漉いて紙と眠りに入る暮し　関谷ほづみ
麗らかや新任教師良く笑ふ　丸山　洋子
切干の日矢より風に乾きけり　原　百合子
白梅や旧街道の分岐点　谷口　浩治
日本橋バス停で待つ乗始　近藤　浩史
冬北斗紙一枚の別離かな　森　佳子
菜の花や赤い電車に海の青　島田　和典
春の天一村かかへ蔦舞へり　粟野みねお
座布団をすゝめ無言の日向ぼこ　増澤　明
名刹の廊下の軋み余寒なほ　新町　恵子
太鼓打つ背の躍動土匂ふ　松井　吉子
過疎の村草駒返る母屋跡　松嶋　粋白
ウクライナ核に脅える冬の朝　奥田　和子
母馬の眼のみ映りて子馬の眼　白井美恵子

入賞作品（当日句の部）

俳人協会賞
祭笛ピアスの光る男振り　服部　智恵

岐阜県支部賞
滝水の須臾も古びぬ光かな　岩田　恵子

岐阜県知事賞
夏来る光の帯の長良川　三本松隆男

岐阜県議会議長賞
レース編む母のかぎ針光りづめ　田畑　清美

岐阜県教育委員会賞
背泳ぎの空にゆるりと鳶一羽　井藤　正一

岐阜市長賞
太き梁光りて鄙の夏座敷　武藤　真弦

岐阜市議会議長賞
泳ぎ出す横一列の水しぶき　永田　良子

岐阜市教育委員会賞
戦ぎ出す前頭葉や新樹光　片桐　栄子

岐阜観光コンベンション協会賞
笹の葉を転がる光夏料理　近藤　磯子

秀逸賞
白牡丹月の光にくづれけり　川島　靖子
木もれ日は光の音符風薫る　柴田　恭雨
緑さす新婦の胸に光るもの　前川けい子
ソーダ水胸に光の乱反射　奥山　ゆい
田を植ゑて千の棚田の光り合ふ　岩上　利一
村中の光あつまる初幟　古田　幸治
滚つ瀬を光りとなりて鮎上る　馬田　伸子
夕刊を夏至の光で読んでゐる　竹嶋富美子
水切りの散らせる光夏来たる　音頭　恵子
日盛を来て白毫の光かな　飯田　正幸
遠泳の兄は小さき点となり　斉藤千津子
一番藍刈る暁光の伊吹晴れ　尾崎恵美子
駆け上がる神馬いななく新樹光　堀　学
羽撃きて光の中へ燕の子　石田　立子
月光に刺されて守宮動かざる　森　一平
夫にあり我に無きもの新樹光　林　富士子
風薫る山車蔵の錠黒光り　小島　節子
雨あとの密なる光青葡萄　久島　洋子

耀未知子先生の講評より

しろがねの連山はるか土筆摘む　度会さち子
俳句の王道をいっている。遠くには立派な山が連なっている。まだまだ雪が残っている。それに対して自分は、その手前で、ささやかに土筆を摘んでいる。遠景近景の姿で美しい句、たいへん好感を持った。しろがねのという入り方は響きがよろしくて素敵だと思った。

一穢なき伊吹嶺のいろ犬ふぐり　竹中　孝子
一穢のい、伊吹嶺のい、いろのい、犬ふぐりのい、よくここまで凝ったもんだと思った。岐阜県や三重県の方達は伊吹山が好きで、思い入れがたっぷりあるんだといつも感じていたが、この句でも伊吹嶺に対する畏敬の念が感じられて、たいへん素敵だと思った。遠景と近景をきれいに対比させるという俳句の王道をいく作品だった。

滝水の須臾も古びぬ光りかな　岩田　恵子
使うのが難しい須臾という言葉、一瞬もという、束の間も古びないということ。滝の水はごうごうといつも流れているわけですから古びないのが当たり前、常に新鮮な水というわけです。それをわざわざ一句にしたところが俳句的で大変面白いと思った。もしかしたら似たような発想の句が余所にもあるかも知れないが、この句の手柄は須臾も古びぬという言葉できっぱりと言い切ったところだと思う。

笹の葉を転がる光夏料理　近藤　磯子
星野立子の夏料理の句のように大胆に詠まれたら、どうしたらよいだろうと考えたときに、ずっと細やかなところに目をとめるか、夏料理以外の人に目を向けるか、いろいろ考え方があると思うが、この句は笹の葉を転がる光ということで、水の粒、水滴が転がっていたのだろうと思う。大変美しい句だと思った。

受賞のよろこび

しろがねの連山はるか土筆摘む　度会さち子
御嶽山や遠く南アルプスまでも銀色に光って見える早春の堤での一句です。耀未知子先生から遠景と近景を巧みに詠んだ美しい句との評を戴き、大変光栄に思います。

祭笛ピアスの光る男振り　服部　智恵
コロナ禍で長らく控えられていた垂井曳山祭を久しぶりに見た時の嘱目吟です。巡行の男衆の中に溌溂とした若者がいて、耳のピアスが印象的だったので兼題の「光」が浮かんで一句になりました。

大会の充実

顧問　荻原　正三

私は八十路となり、多治見から岐阜へ来るのも疲れるようになり、お役御免を願っていました。今年度の支部総会で副支部長を退任できましたが、今度は顧問ということになりました。大任に身の引き締まる思いです。

岐阜県支部の最大の事業は「芭蕉の道俳句大会」です。沢山の人に参加していただき、参加数は県別主催行事の上位に位置付けられています。今後は結社の枠を超えて参加し易い環境整備、投句作品の内容向上が必要と思っています。各位のご理解とご尽力をお願い申し上げます。

お世話になります

副支部長　足立　賢治

このたび、副支部長の大役を仰せつかりました「会員証No.二〇―〇二四二」の足立です。どうぞよろしくお願いします。

岬雪夫天衣主宰（現名誉主宰）の推薦をいただき、平成二十年に協会のお仲間入りをさせていただきました。当時の印象としては、やはり喜びよりも緊張感、責任感の方が強かったと思います。「名前負け」しないようふんばろうと自分に言い聞かせておりました。その伝統ある協会岐阜県支部では、今年も「芭蕉の道俳句大会」が盛大に開催されました。この勢いを絶やさないよう努めます。

新理事として

理事　古田　徹生

この度、理事に推挙され就任いたしました。光栄なことながら、責任の重さに緊張しております。

十年ほど前、協会員になって、一人前の俳人と認められたような気がして、たいへんうれしかったことを覚えています。

今後は理事として、少しはお役にたてればと思います。協会の発展には、会員の増加が必要です。そのためには、会員にステータス感とメリットがあることが必須になります。協会が結社を超えた交流の場を提供し、刺激しあえればと夢想しております。よろしくお願いいたします。

伝統あるこの会に

理事　古田　雅通

このたび、理事を仰せつかりました古田と申します。伝統あるこの会に関わらせていただけることを光栄に存じます。

今まで一般の参加者としてこの会に出席しておりましたが、支部長様はじめ事務局の皆様方の事前から当日にいたるまでの周到なるご尽力と当日協力していただいている方々のお力添えにより、充実した会になっていたことを痛感しております。

微力ではありますが、少しでもお役に立てるよう努力いたす所存でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

岐阜県支部　総会

事務局長　舩戸　成郎

令和六年一月二十九日（月）午後一時半より、岐阜駅ハートフルで支部総会を行う。（出席者三十名、委任状百五十四名、会員数百九十五名）。

今津大天支部長の開会挨拶、その後、議長に横田義男副支部長を選出し議案の審議に入った。

第一号議案「令和五年事業報告、及び収支決算報告」が事務局長、関谷恭子会計、近藤磯子監事より報告され、承認された。次に第二号議案「令和六年事業計画（案）、同予算（案）」、第三号議案「令和六年役員（案）」が提案され、左のように承認された。

最後に、藤田真木子副支部長が閉会挨拶。五月の「芭蕉の道」俳句大会の成功を期して締めくくった。

俳人協会岐阜県支部令和6年役員

役職名	氏名	所属
顧問	佐藤をさむ	鶴
	岬　雪夫	天衣
	辻　恵美子	梅檀
	宮川　典夫	貝寄風
	大野　鵠士	獅子吼
	荻原　正三	**天衣**
支部長	今津　大天	つちくれ
副支部長	藤田真木子	煌星
	横田　義男	香雨
	足立　賢治	**天衣**
理事	小瀬千恵子	天華
	渡辺　純枝	濃美
	加藤　忠美	日輪
	透　乙美	香雨
	長野美代子	濃美
	森崎　義道	貝寄風
	瀬尾　千草	獅子吼
	小森　広司	香雨
	寺田　好子	日輪
	富田　澄江	鶴
	小野木武守	つちくれ
	舩戸　成郎	濃美
	矢田　邦子	梅檀
	澤木　正子	鷹
	保浦小夜子	自在
	古田　雅通	**天衣**
	古田　徹生	**梅檀**

役職名	氏名	所属
監事	近藤　磯子	梅檀
【支部長委託】		
地区委員	野村　務	天衣
	桐山　晃一	日輪
	岩田　佳子	貝寄風
	宮本　光野子	獅子吼
	各務　恵子	獅子吼
	白橋美智子	香雨
	宇佐見俊二子	日輪
	関谷　恭子	濃美
	田畑　清美	つちくれ
	伊藤　しき子	天衣
	毛利　慶子	香雨
	三本松隆男	香雨
	川島　有子	梅檀
	小泉　裕子	濃美
	塚本　六可	**獅子吼**
事務局		
（局長）	舩戸　成郎	濃美
（副局長）	野村　務	天衣
（会計）	関谷　恭子	濃美
（編集長）	藤田真木子	煌星
（編集）	小野木武守	つちくれ
（編集）	富田　澄江	鶴
（局員）	岩田　佳子	貝寄風
（局員）	小泉　裕子	濃美

太字：新任又は移動　　2024年4月1日現在

県内結社の歴史・折々

「栴檀」創刊の背景

辻　恵美子

「栴檀」は沢木欣一主宰の「風」岐阜県支部のメンバーを中心に二〇〇二年五月に創刊された。

「風」が終刊になり、拠り所を失った人たちが「今までのメンバーで共に俳句活動をしたい」との思いが結社へと発展したのである。結社名を決めるのがなかなかであった。思う名のほとんどが全国の結社に既に存在していたのである。

毎年栴檀の咲く五月に全国的な俳句大会を開催し、壇上にこの花を飾った。が、枝を伐るのも水上げをするのも大変で、係はご主人の力を借りたり、水上げにウィスキーを加えたりして苦労して会場に運んだのだった。そして大会には凛とした大ぶりの枝の花が飾られたのである。

創刊時は同人十七人、会員一四三人、栃木県佐野市から元「風」の同人、三関浩舟氏始め数十人の参加があったのは心強かった。

創刊俳句大会は岐阜駅隣の「ぱ・る・るプラザ岐阜」（現、じゅうろくプラザ）にて行い九十一名の参加があった。栃木からも五人の参加があったがその時の三関浩舟先生の姿が今も記憶にある。

三関先生は栃木で「わたらせ」という俳句のグループを主宰し、既に一家を成しておられた方である。大正七年生まれの当時八十四歳。第三回大会では講演をしていただいた。インパール作戦に召集され、銃を片手に月の光で歳時記を読んだという話や、六百キロを徒歩で行軍する話、足に二〇〇粒もの肉刺が出来て歩けなくなり、身を軽くするためついに歳時記を谷底に捨てたという話などをお聞きしたが、その凄まじいまでの俳句魂に畏れを抱いたのを憶えている。

三関先生は長く教職に就かれ、のちに校長も務められた方で多くの生徒を育てて来られた。「栴檀」にもそのような思いで来てくださったに違いないが、温かくやさしく私は親心を感じていた。当時時々くださった葉書のことばがうれしく、そのお気持ちが伝わってきた。

長村雄作氏はその頃「風」の岐阜支部長、今から思えば氏が主宰するのが適任だったかも知れない。が、支部の皆に参加を呼びかけてくださり、資金のことなど細部に心配をしてくださった。

「栴檀」はそもそも今は亡き坂部尚子さんから始まったのである。その頃私は俳句塾を開いており、塾生の彼女を中心に、そのOB、OGなども集まって発足したのである。尚子さんなしに「栴檀」は存在しなかっただろうと思う。右も左もわからない結社を立ち上げ始動させ軌道にのせるために、私は尚子さんとどれ程議論したかわからない。本当に頼もしく有難い存在だった。しかしある意味それは我流であり、至らぬことも多々あったことと思っている。

最初の一年間は隔月刊、二年目から月刊として今日に至っている。

寒雀桶より尾羽はみだせり　江崎　和子
一面の新雪を縫ひ長良川　遠藤　三鈴
陣場野の土塁のかげの寒施行　矢田　邦子
釣り好きが来て生臭き日向ぼこ　梅村　五月
天平の礎石に跳ねし春霰　後藤　和朗
雲水の耳朶うつくしき雪の果　市堀　玉宗
涙もろき白鳥国へかえりけり　辻　恵美子

（創刊号同人作品より抜粋）

句集　落人

関谷　恭子　著
ふらんす堂
二〇二四年二月刊

鵜供養会のご案内

◇鵜供養会（法　要）
日　時　十月二十日（日）午前十時より
場　所　霊天庵内　鵜　塚　にて
（岐阜市長良大前町二―一）
（バス停「岐阜グランドホテル前」下車徒歩三分）

◇短冊流し（法要後、長良河畔へ移動）

◇鵜供養俳句会・参加自由
（主催：具寄風俳句会　後援：俳人協会岐阜県支部）
会　場　「長良川うかいミュージアム」会議室
（岐阜市長良五十一番地二）
開　会　午後一時（投句締切十二時五十分）
投　句　三句（当季詠可）　会　費　千円
※昼食は各自にてお済ませください

編集後記

◇鵜供養会・鵜供養俳句会に多数ご参加ください。
◇残暑厳しき折、皆様方のご健吟をお祈りします。
（藤田・小野木・富田・船戸・関谷）